

2～3歳児をもつ母親の自己評価 ——子どもの扱いにくさおよび発達との関係——

高濱 裕子*・渡辺 利子**

How Do Mothers Estimate Themselves through Parenting?
—The Relations between Difficultness and Developmental Change of Toddlers—

Yuko TAKAHAMA and Toshiko WATANABE

本論の目的は、第一子の2歳児と3歳児をもつ母親を対象に、子どもの扱いにくさと反抗期にいるという認識が母親へ及ぼす影響を検討することである。3つの仮説の検討を通して、次のことが明らかとなった。(1)子どもが扱いやすいと認識する母親は、扱いにくいと認識する母親よりも、母子関係を良好なものととらえ、抑うつ的でなかった。(2)子どもが反抗期にいるか否かという母親の認識の違いによって、母子関係と抑うつ性に差はなかった。(3)母親としての自己評価は、2歳児では反抗期・扱いにくい群が最も低く、3歳児では非反抗期・扱いにくい群と反抗期・扱いにくい群が低かった。

問 題

親子関係や家族関係をシステムとしてとらえると、システムを構成するメンバーに何らかの変化が起きた場合、その影響は全体へと波及することが予想される。

親と子どもの関係では、システムを変化させる大きな要因として子どもの誕生や子どもの発達的な変化があげられる。前者のタイプの研究には、初めて親になった夫婦や子どもを出産した母親とその家族に焦点を当てたものがある（例えば柏木・若松，1994；氏家・高濱，1994）。一方、後者のタイプの研究はまだそれほど蓄積されていない。2歳前後に本格化する反抗期や思春期の子どもの問題は、親にそれまでの対応の見直しや修正をせまると考えられる。したがって、システムに出現する変化を検討するには格好の時期といえよう。

われわれは子どもの反抗期に焦点を当て、親子システムの変化を記述することを最終的な目標とする。そこで、まず横断的な方法によってシステムに起きる変化を予測し、今後さらに縦断的な方法によってその結果を検証したいと思う。

* 人間関係学部 人間関係学科

** 武蔵野大学 現代社会学部 社会福祉学科

ところで、子どもや育児に対して、親はポジティブな感情とネガティブな感情を同時にもつ（柏木・若松, 1994；高濱, 2000；氏家, 1996）と指摘される。ネガティブな感情は、母親の精神的健康という観点から重視されてきた。マタニティブルーや産後の抑うつ、育児不安や育児ストレスなどが、子どもの成長や母親としての適応に悪影響を与えることが明らかにされている。ネガティブなできごとやストレスの蓄積が母親の抑うつを増大させること、抑うつ重症度と体罰が関連していることなども示されている（例えば Cutrona, 1984；大日向, 1988；佐藤・菅原・戸田・島・北村, 1994 など）。

これらの研究から、母親の精神状態を緩衝する要因として夫婦関係の質、ソーシャルサポートの程度、夫の育児参加の度合いなどが見出されている。しかし子ども側の要因、例えば子どもの年齢、性別や出生順位、子どものもつ行動特徴などは十分に統制されていない。どのような子どもなのかによって親への影響は異なると予想されるから、子ども側の要因は無視できない。

子どもの気質特徴も、母親の精神的健康やしつけ方略に影響を及ぼす。例えば 42 か月齢の子どもの気質的に難しいと認識する母親は、8 か月後の測定ではそうでない母親に比べて精神的に不安定になる傾向があった（Stevenson-Hinde, & Simpson, 1982）。母親が子どもを気質的に難しい子どもだと認識すると、親としての効力感が低下する傾向にあった（Gross, Conrad, Fogg, & Wothke, 1994）。

子どもの気質特徴と親のしつけ方略の関係では、乳幼児期に見られた親のしつけに対する抵抗の強さと親による統制の強さの間に交互作用が見出された（Bates, Pettit, Dodge, & Ridge, 1998）。母親のしつけ方略は、異なる気質をもつ男児と女児の間では違った。子どもの性は、気質と親のしつけを結びつけるモデレーターの役割をはたす（Putnam, Sanson, & Rothbart, 2002）。

子どもの気質的扱いにくさと母親の育児ストレスの関係では、出生順位による交互作用が見出された（水野, 2002）。第一子をもつ母親の場合、子どもがある程度成長すると子どもの気質診断類型と母親の育児ストレスとに関連が見られるようになった。

このような出生順位による違いは、親の育児経験の差によって説明される。経産婦に比べると、初産婦は経験や知識の不足などから子どもの状態や行動を好ましくないもの、ストレスフルなものとして評価しやすいのかもしれない（佐藤・菅原・戸田・島・北村, 1994）。子どもの反抗や自己主張についても、第一子の母親の方がいらだちや困惑を経験していた。第一子の親は子どもとの大きな対立を初めて経験するため、適応の努力を必要とするのかもしれない（坂上, 2003）と説明されている。

ところで、2 歳から 4 歳ごろの時期は“Toddlerhood”と呼ばれる。乳児期から脱し、歩行による移動が確立する時期にあたる。言語面の発達や社会性の発達も著しい。一般的に反抗期と呼ばれる時期であり、子どもは自分の行動に制止や制限を加える大人に対して、意図的な反抗や強い自己主張を示し始める（Wenar, 1982）。アメリカでは“Terrible-Twos”と呼ばれ、日本のある地方では「草木にきらわれる 3 歳児」と言い習わされている。子どもが反抗期を迎えると、親は非常に強いいらだちや困惑を経験し、子どもの反抗や自己主張に権威的対応や強圧的対応をとる（Ujiie, 1997）。

この時期になると、親の関心は身体健康や発育面からしつけや情緒的な問題へと変化する。電話による育児相談では、子どもの反抗に関する内容が上位を占める（児童虐待防

止協会, 1997)。この時期の子どもをもつ親は、他の時期に比較して子どもや子育てに対するネガティブな感情を経験する機会が多いのではないだろうか。

母親が子どもに適切に対処できるかどうかは、母親の努力だけでは決まらない。もちろん育児には相応のスキルも必要であるが、親の行動は、子どもの発達の状況や子どものもつ特徴によってその意味が異なってくる。この時期の子どもをもつ親にとって大きな課題は、自律と自立をめざして日常生活に必要なスキルを見につけさせることである (Edwards, & Liu, 2002)。もし子どもが反抗期にいとすれば、日常生活場面での親のさまざまな要求は、子どもの拒絶にあうことが多いだろう。親のしつけが子どもの抵抗にあうとすれば、社会化のプロセスはそう簡単には進行しないことになる。

子どもの状態が改善されない時や子どもに受け入れられない時、母親は対処困難と感じるだろう。時間経過にしたがって次々と影響が累積されていくトランザクションの考え方にもとづけば、対処の困難さが子どもへの不適切な対処を生み出し、さらに母親の自己概念を悪化させるだろう。つまり、「自分は母親としてうまくやっていない」「母親として失格だ」などのネガティブな感情を抱くことになる。

子どもや育児に対する大変さは、母親の自己概念に対する脅威となる (Fleming, Ruble, Flett, & Van Wagner, 1990)。母親としての自分を否定的にとらえる、自分の能力を低く見積もる、自分に自信をもつことができないなどネガティブな自己概念を形成し、自分自身の評価にもそれが反映されるだろう。

本論の目的は、子どもが扱いやすいか否かと反抗期にいとるか否かという認識が、母親へいかなる影響を及ぼすのかを検討することである。子ども側の要因を統制し、第一子の2歳児と3歳児をもつ母親を対象とする。加えて、先行研究で見出された子どもの扱いにくさと反抗期にいとることを同時に考慮する。そして、母親が自分と子どもの関係をどう認識しているかという点から母子関係を、母親の精神的健康がどうであるかという点から抑うつ性を、母親が母親としての自分をどう見積もっているかという点から母親としての自己評価を分析する。

これまでの議論より、次の3つの仮説が導き出される。(1)自分の子どもが扱いやすいと認識する母親は、扱いにくいと認識する母親よりも、母子関係を良好なものととらえ、しかも抑うつ的ではないだろう。(2)自分の子どもが反抗期にいとないと認識する母親は、反抗期にいとると認識する母親よりも、母子関係を良好なものととらえ、しかも抑うつ的ではないだろう。(3)子どもの特徴 (扱いやすい・扱いにくいと反抗期にいとる・反抗期にいとらない) の組み合わせにより、母親は4グループに分類される。母親としての自己評価は、扱いにくい子どもが反抗期にいとると認識された時に最も低くなるだろう。

方 法

調査対象：本調査は1歳児、2歳児、3歳児を対象に、子どもの反抗期とそれに対する母親の認識を検討しようと計画されたプロジェクトの一部をなすものである。本論の対象は核家族の第一子である2歳と3歳の子どもをもつ母親である。分析対象は、平成15年7月末までに返送された3つの市の回答 (2歳児合計197名、3歳児合計172名) であった。対象児と対象者の属性をTable 1とTable 2に示す。なお最終的な分析対象は2歳児が190名、

Table 1 対象児の属性

	合計 人数	平均月齢 (分布, SD)	性別	
			男児	女児
2 歳児	197 名	25.5 か月 (分布 23-30, SD=1.9)	104	93
3 歳児	172 名	36.2 か月 (分布 34-39, SD=0.7)	90	82

Table 2 対象者の属性

	平均年齢 (分布, SD)	最終卒業校				就労別	
		中学	高校	専門・ 短大	大学 以上	専業 主婦	有職
2 歳母	31.3 歳 (分布 19-40, SD=3.7)	1.0%	19.3%	49.7%	29.4%	70.1%	27.9%
3 歳母	34.8 歳 (分布 20-45, SD=3.7)	0.1%	22.1%	51.7%	25.0%	73.8%	25.0%

注. いずれのカテゴリにも無記入者がいるので, 合計は 100%にならない。

3 歳児が 163 名であった。

調査方法：2つの地域で調査を実施した。(1)愛知県下の2市(A市とB市)の乳幼児健診に参加した当該年齢の第一子をもつ保護者に調査の依頼をした。あらかじめ2市の担当部局(生涯学習課と健康推進課)と打ち合わせ(調査概要や調査目的の説明, 調査内容の確認など)をおこない, A市では平成14年11月より, B市では平成15年1月より調査を開始した。第一著者が毎月当該年齢の健診日に健診会場に出向き, 全体にあるいは個別に趣旨説明をした。その場で協力可能と意思表示をした保護者に質問紙(調査の主旨説明書, 返信用封筒を含む)を直接手渡し, 約2週間をめぐり返送するよう依頼した。A市とB市をあわせた平均回収率は約4割であった。(2)東京都下のC市に在住する当該年齢の第一子をもつ保護者に, 郵送法によって調査を依頼した。郵送にした理由は, 担当部局(健康推進課と母子保健課)との確認の結果, 調査対象年齢と乳幼児健診の時期が適合しなかったことによる。対象児の月齢差を最小にするため, 月ごとに誕生日を迎えた該当児を住民基本台帳より抽出し, 月末に質問紙(調査の主旨説明書, C市からの調査協力依頼書, 返信用封筒を含む)を郵送した。回収期間は約2週間とし, 翌月の中旬までに返送するよう依頼した。平成15年1月から調査を開始し, 平均回収率は約2割であった。

調査内容：質問紙は, 次の4つの内容から構成されている。①人口統計学的変数: 家庭の状況(父母の年齢, 最終卒業校, 職業, 結婚年数など), ②子ども変数: 子どもの成育歴, 行動特徴, 扱いやすさ, 反抗の状況, ③母親変数: しつけの目標, 反抗の扱い, 親業ストレス(親業に対する自信, 親役割による欲求不満など), 母親としての評価, 抑うつ性, ソーシャルサポートなど, ④夫婦変数: 夫婦関係(妻に対する夫の態度, 愛情関係)。なお質問紙は, 1歳用と2・3歳用の2種類を用意した。両者の違いは子どもの行動特徴に関する内容で, 1歳児は気質について, 2歳と3歳には行動の自己制御について尋ねた。

分析内容：本論では子どもの扱いやすさ, 子どもの反抗の状況, 母子関係, 抑うつ性, 母親としての自己評価を分析する。

子どもの扱いやすさについては, 「お子さんはあなたからみて扱いやすい子どもだと思

いますか、それとも扱いにくい子どもだと思いますか」と尋ね、「扱いやすい」「どちらかといえば扱いやすい方」「どちらかといえば扱いにくい方」「扱いにくい」の4件法で回答してもらった。子どもの反抗の状況は、「今現在、お子さんは反抗期にいますか」と尋ね、「まだ反抗期にはいないと思う」「少し反抗期になってきたような気がする」「反抗期だと思う」の3件法で回答してもらった。なおそれぞれの回答の根拠として、具体的な子どもの行動や事例を記述してもらった。

母子関係尺度は Parenting Stress Index (PSI, Abidin, 1977) をもとに作成された KGPSI (野澤, 1989) を参考に作成された 28 項目（下位尺度は親業に対する自信、親役割による欲求不満、子どもと親の愛着からなる）からなる。親業に対する自信は 12 項目（どうやって子どもを育てていけばいいのか時々わからなくなることがある、子育てやしつけの責任を担うことは、正直いって私には負担が重すぎる、子どもがあまりに聞き分けがなかったり、騒動を起こしたりする時には自分の育て方が悪かったのではないかなど）、親役割による欲求不満は 7 項目（子どもができて以来、趣味や何かの集まりに出かけたり友だちと会う機会が少なくなった、私の生活の大部分は子どものために費やされている、昔には思ってもいなかったほど、生活の多くが子どもの要求に合わせるために犠牲にされている、など）、子どもと親の愛着は 9 項目（この子と私は相性が悪いのではないかなど）の質問からなる。回答形式は、「いつも」「ときどき」「まれに」「全然ない」の4件法であり、「いつも」に1点、「ときどき」に2点、「まれに」に3点、「全然ない」に4点を与え得点化した。得点が高いほど関係が良好であることを示すようにリコードしてある。

抑うつ性尺度は Zung の Self-rating Depression Scale (1965) の日本語版 SDS (福田・小林, 1973) を参考に作成された 20 項目（気分が沈んで憂うつだ、朝方が一番気分がよい、泣いたり泣きたくなったりする、夜よく眠れない、食欲は普通にある、セックスに関心がある、やせてきた、便秘する、心臓がドキドキする、疲れやすい、考えがよくまとまらない、何事もたやすくできる、落ち着かずじっとしていられない、将来に希望がある、いらいらする、気楽に決心できる、自分は役に立つ人間だと思う、自分の人生は充実している、自分が死んだ方が他人にとってよいのではないかなど）の質問からなる。回答形式は、「いいえ」「ときに」「たいてい」「いつも」の4件法であり、「いいえ」に1点、「ときに」に2点、「たいてい」に3点、「いつも」に4点を与え得点化した。得点が高いほど抑うつ的であることを示すようにリコードしてある。

母親としての自己評価尺度は、「私は自分が」と「母親としての自分は」の2項目の質問からなる。回答形式はそれぞれ5件法で、「私は自分が」については、「大変よい母親であると思う」「世間並みよりはよい母親であると思う」「世間並みの母親であると思う」「母親として少し問題があると思う」「あまりよい母親ではないと思う」であった。「母親としての自分は」については、「どんなことでも対応できると思う」「大体のことには対応できると思う」「いくつかの問題以外には対応できると思う」「対応できるかどうか、少し気がかりなところがある」「うまく対応できるとは思えない」であり、それぞれ順番に1点から5点を与えて得点化した。得点が高いほど自己評価が良好であることを示すようにリ

コードしてある。

結果と考察

1. 子どもの扱いやすさ・扱いにくさと母親の認識

まず、母親が自分の子どもの特徴をどのように把握しているかを検討する。子どもの扱いやすさと母親の認識を Table 3 に示した。2 歳児では 2 割強の子どもが「扱いやすい」と、5 割強が「どちらかといえば扱いやすい」と認識されている。また 1 割強の子どもが「どちらかといえば扱いにくい」と、5 分ほどが「扱いにくい」と認識されている。3 歳児でも同様の傾向があり、約 2 割が「扱いやすい」と、6 割強が「どちらかといえば扱いやすい」と認識されている。また 1 割強が「どちらかといえば扱いにくい」と、1 分が「扱いにくい」と認識されている。

子どもの扱いやすさ・扱いにくさという認識には、子どもの性が関与している可能性がある。女兒は親に対してより従順である (Kagan, 1978; Putnam, Sanson, & Rothbart, 2002) ため、男児の方が扱いにくいと認識されるだろう。この点を検討するために、Table 4 に子どもの性別と扱いやすさの認識を示した。

2 歳男児のうち、扱いやすいと認識された子どもは約 7 割、扱いにくいと認識された子どもは 3 割弱である。女兒では扱いやすいが約 9 割で、扱いにくいのが 1 割強である。3 歳男児では、扱いやすいと認識された子どもが約 8 割、扱いにくいと認識された子どもは約 2 割である。女兒では扱いやすいが 9 割で、扱いにくいのが約 1 割である。

つまり、2 歳児、3 歳児ともに扱いやすいと認識された子どもは男児より女兒に多く、扱いにくいと認識された子どもは女兒より男児に多い。また年齢的な違いとして、扱いに

Table 3 子どもの扱いやすさについての母親の認識

	扱いやすい	どちらかといえば 扱いやすい	どちらかといえば 扱いにくい	扱いにくい	不明
2 歳児	48 名 (24.4)	108 名 (54.8)	30 名 (15.2)	11 名 (5.6)	0
3 歳児	36 名 (20.9)	110 名 (64.0)	23 名 (13.4)	2 名 (1.2)	1 名 (0.5)

注. () の数値は割合を示す。

Table 4 子どもの性別と扱いやすさの認識

	扱いやすい	扱いにくい	合 計
2 歳児	156 名	41 名	197 名
男児	75 (72.1)	29 (27.9)	104 (100.0)
女兒	81 (87.1)	12 (12.9)	93 (100.0)
3 歳児	146 名	25 名	171 名
男児	73 (81.1)	17 (18.9)	90 (100.0)
女兒	73 (90.1)	8 (9.9)	81 (100.0)

注. () の数値は、年齢別・性別の割合を示す。

Table 5 扱いやすい群と扱いにくい群における2つの尺度の平均得点

	母子関係尺度得点			分散分析結果	抑うつ性尺度得点			分散分析結果
	扱い易い群	扱い難い群			扱い易い群	扱い難い群		
2歳児	85.6 (9.9)	77.5 (11.0)		易>難**	41.9 (5.7)	45.6 (6.7)		易<難**
3歳児	86.5 (10.1)	76.5 (9.5)		易>難**	40.9 (5.7)	43.3 (6.7)		易<難†

注. () の数値はSDを示す。

†.05<p<.10, *p<.05, **p<.01

くいと認識された子どもの割合は3歳児より2歳児に多い。これらの結果は、先行研究の知見とほぼ一致する。2歳児と3歳児との間に差が生じた可能性として、①本サンプルの2歳児には扱いにくい子どもが多く含まれている、②3歳児の親は2歳児の親より子どもとのつきあいに慣れており、その認識が反映されている、③3歳児に比べて、2歳児は特に扱いにくい年齢である、の3つが考えられる。

本サンプルの2歳児と3歳児は、同様の手続きをへてリクルートされた。したがって①である可能性は低く、あとのふたつの可能性が高いだろう。つまり2歳児と3歳児で生じた差は、3歳児の母親の方が育児経験が若干長いこと、3歳児の母親は反抗期と呼ばれる時期をある程度経験していることにより、2歳児の母親より子どもや育児に習熟していること、2歳児がより扱いにくいことを示す結果と考えられる。

次に、扱いの難易と母子関係および抑うつ性との関係を検討する。ここでは、扱いやすいとどちらかといえば扱いやすいをあわせて「扱いやすい群」とし、扱いにくいとどちらかといえば扱いにくいをあわせて「扱いにくい群」とした。Table 5には、2つの群の母子関係尺度得点と抑うつ性尺度得点を示した。

母子関係尺度得点について分散分析をおこなった結果、2歳児における群の効果は有意であり ($F_{(1,177)}=19.35$, $p<.01$)、3歳児における群の効果も有意であった ($F_{(1,156)}=20.20$, $p<.01$)。次に、抑うつ性尺度得点について分散分析をおこなった結果、2歳児における群の効果は有意であり ($F_{(1,185)}=11.74$, $p<.01$)、3歳児における群の効果は有意傾向であった ($F_{(1,165)}=3.30$, $.05<p<.10$)。

以上より、仮説(1)は支持された。つまり子どもが扱いやすいか否かによって、母子の関係性や母親の抑うつ性に影響を及ぼす可能性が示唆された。

2. 反抗期・非反抗期と母親の認識

子どもが反抗期にいるか否かと母親の認識の関係を検討する。子どもの反抗期についての母親の認識をTable 6に示した。2歳児の2割強は「まだ反抗期ではない」と認識していた。5割強が「少し反抗期」と、2割強が「反抗期」と認識していた。また「その他」が若干あった。これは「以前より落ち着いた」「反抗期を卒業した」などの記述があった者である。3歳児では、2割が「まだ反抗期ではない」と認識していた。約5割が「少し反抗期」と、約3割が「反抗期」と認識していた。「その他」も若干あった。

つまり、2歳児、3歳児ともに約8割の子どもが反抗期にいると認識され、約2割は反抗期にいないと認識されている。

次に、子どもが反抗期にいるか否かと母子関係および抑うつ性の関係を検討する。ここでは、反抗期と少し反抗期をあわせて「反抗期群」とし、まだ反抗期ではないとその他を

Table 6 子どもの反抗期についての母親の認識（人数）

	まだ	少し反抗期	反抗期	その他	不明
2 歳児	47 (23.9)	102 (51.8)	44 (22.3)	1 (0.5)	3 (1.5)
3 歳児	35 (20.3)	81 (47.1)	50 (29.1)	2 (1.2)	4 (2.3)

注. () の数値は割合を示す。

Table 7 反抗期群と非反抗期群における 2 つの尺度の平均得点

	母子関係尺度得点			抑うつ性尺度得点		
	反抗期群	非反抗期群	分散分析結果	反抗期群	非反抗期群	分散分析結果
2 歳児	83.9 (10.9)	83.4 (10.3)	n.s.	42.7 (6.0)	42.8 (6.2)	n.s.
3 歳児	84.9 (10.7)	86.0 (9.5)	n.s.	41.6 (6.1)	39.7 (5.3)	n.s.

注. () の数値は SD を示す。

あわせて「非反抗期群」とした。Table 7 に、2 つの群の母子関係尺度得点と抑うつ性尺度得点を示した。

母子関係尺度得点について分散分析をおこなった結果、2 歳児における 2 つの群の平均値の差は有意ではなかった ($F_{(1,176)}=0.07$)。3 歳児における 2 つの群の平均値の差も有意ではなかった ($F_{(1,154)}=0.29$)。次に抑うつ性尺度得点について分散分析をおこなった結果、2 歳児における 2 つの群の平均値の差は有意ではなかった ($F_{(1,183)}=0.01$)。3 歳児における 2 つの群の平均値の差も有意ではなかった ($F_{(1,165)}=2.64$)。

以上から仮説(2)は支持されなかった。反抗期にいるか否かによって、母子の関係性や母親の抑うつ性は直接左右されないことが示唆された。

3. 子どもの状態別グループと母親の自己評価との関係

さまざまな要因が時間経過とともに累積的に影響を及ぼすトランザクションの考え方にもとづけば、子どもの扱いの難易と反抗期にいるか否かという要因がからみ合って、母親に影響を及ぼすことが予想される。次にこの 2 つの観点を同時に考慮した分析をおこなう。

子どもの扱いやすさ・扱いにくさと反抗期にいる・反抗期にいないの組み合わせによって、母親の対応は異なってくると考えられる。それらについての予測を Table 8 に示した。4 つのグループの存在が想定されるが、最も対応しやすいのは非反抗期で扱いやすい子どもであろう。次が反抗期群で扱いやすい子ども、その次が非反抗期群で扱いにくい子どもであろう。そして最も対応しにくいのが反抗期群で扱いにくい子どもであろう。この基準にしたがって 2 歳児と 3 歳児を分類したところ、Table 9 の結果がえられた。

この 4 グループごとに、母親の自己評価尺度得点の平均値を算出して Table 10 に示した。自己評価尺度得点の平均値は、数値上は Table 8 に予測した結果を裏づけるものである。

さらに、母親の自己評価尺度得点について分散分析をおこなった結果、2 歳児における群の効果は有意であった ($F_{(3,186)}=6.06$, $p<.01$)。LSD 法を用いた多重比較によると、反抗期・扱いやすい群の平均が反抗期・扱いにくい群よりも有意に高く ($MSe=1.56$, $p<.01$)、非反抗期・扱いにくい群より有意に高い傾向にあった ($0.5<p<.10$)。また、反

2～3歳児をもつ母親の自己評価

Table 8 反抗期・非反抗期と扱いの難易による
母親の対応についての予測

	扱いやすい (易)	扱いにくい (難)
反抗期群	対応しやすい (2)	最も対応しにくい (4)
非反抗期群	最も対応しやすい (1)	対応しにくい (3)

注. () の数値は対応しやすさの順位を示す。

Table 9 Table 8 の予測にもとづいた年齢別分類結果

	2歳児		3歳児	
	易	難	易	難
反抗期群	115名(59.3)	31名(16.0)	112名(67.1)	18名(10.8)
非反抗期群	39名(20.1)	9名(4.6)	31名(18.6)	6名(3.6)

注. () の数値は割合を示す。無記入者は2歳児3名, 3歳児4名。

Table 10 分類されたグループ別母親の自己評価尺度得点

2歳児	反抗期・易	反抗期・難	非反抗期・易	非反抗期・難	分散分析結果
人数	114名	30名	37名	9名	反・易>反・難**, 反・易>非・難†
平均	6.61	5.73	6.86	5.78	非・易>反・難**, 非・易>非・難*
SD	1.2	1.5	1.0	1.5	
3歳児	反抗期・易	反抗期・難	非反抗期・易	非反抗期・難	分散分析結果
人数	110名	18名	30名	5名	反・易>反・難**
平均	6.57	5.83	6.63	6.40	非・易>反・難*
SD	1.1	1.4	1.0	1.0	

†.05<p<.10, *p<.05, **p<.01

抗期・扱いにくい群の平均が非反抗期・扱いやすい群より有意に低く($p<.01$), 非反抗期・扱いやすい群の平均が非反抗期・扱いにくい群より有意に高かった ($p<.05$)。

3歳児における群の効果は有意傾向であった ($F_{(3,159)}=2.54$, $.05<p<.10$)。LSD法を用いた多重比較によると, 反抗期・扱いやすい群の平均が反抗期・扱いにくい群より有意に高く ($MSe=1.20$, $p<.01$), 反抗期・扱いにくい群の平均が非反抗期・扱いやすい群より有意に低かった ($p<.01$)。他の群間の平均値には, 有意な差はなかった。

分散分析の結果にもとづいて母親の自己評価尺度得点を高い順番に示すと, 2歳児は非反抗期・扱いやすい群≒反抗期・扱いやすい群>非反抗期・扱いにくい群>反抗期・扱いにくい群であり, 予想1位≒予想2位>予想3位>予想4位であった。

3歳児では, 非反抗期・扱いやすい群≒反抗期・扱いやすい群>非反抗期・扱いにくい群≒反抗期・扱いにくい群であり, 予想1位≒予想2位>予想3位≒予想4位であった。

以上から仮説(3)は2歳児でほぼ支持され, 3歳児では部分的に支持された。

全体的考察

本論では、第一子の2歳児と3歳児をもつ母親を対象に、子どもが扱いやすいか否かと反抗期にいるか否かという認識が母親へどのような影響を及ぼすかを検討した。3つの仮説を通して検討した結果、次のことが明らかとなった。(1)自分の子どもが扱いやすいと認識する母親は、扱いにくいと認識する母親よりも、母子関係を良好なものととらえ、抑うつ的でなかった。(2)自分の子どもが反抗期にいると認識する母親と反抗期にいないと認識する母親では、母子関係と抑うつ性において差はなかった。(3)母親としての自己評価は、2歳児では非反抗期・扱いやすい群と反抗期・扱いやすい群が最も高く、次いで非反抗期・扱いにくい群であり、反抗期・扱いにくい群が最も低かった。3歳児では、非反抗期・扱いやすい群と反抗期・扱いやすい群が非反抗期・扱いにくい群と反抗期・扱いにくい群より高かった。

子どもの扱いやすさ・扱いにくさと母子関係、抑うつ性の関係は、先行研究の知見を裏づけるものであった。一方反抗期に関しては、反抗期にいる群と反抗期にいない群間に差がなかった。もし反抗期にはいったと認識することで直接的な影響を受けるとすれば、2～3歳児の親子関係やこの時期の子どもをもつ母親の精神的健康はおしなべて悪化してしまう。これは進化論的な見地からは考えにくいことである。

反抗期にいるか否かは直接母子関係や抑うつ性を左右せず、むしろ媒介的に働いている可能性が示唆される。扱いにくい子どもが反抗期にいると認識された時、母親の自己評価得点は4グループ中の最低であった。この結果は、時間経過とともにさまざまな要因が累積的にその影響を及ぼすトランザクション・モデルの考え方を裏づけるものであった。

ただし、結果の解釈には留意する必要がある。まず、子どもの扱いやすさ・扱いにくさに関しては、母親の主観である可能性と子どもの気質特徴を反映している可能性があげられる。子どもの特徴は親の知覚を通して認識される。母親の知覚はさまざまな要因によってゆがみをもつ(氏家, 1996)のである。気質的扱いにくさをもつ子どもであるかどうかは、行動観察も含めて検討する必要がある。本研究プロジェクトでは、今後1歳児の母子を行動観察も含め、縦断的に追跡していく予定である。

母親側の特性については、子育てによって抑うつ傾向や自己評価が影響を受けたのか、子どもをもつ以前からそのような傾向をもっていたのかは明らかでない。厳密に言えば妊娠以前から追跡する必要があるが、1歳児の母親について各変数の時間的変動を確認していけば、ある程度は推測できるだろう。

2歳児と3歳児の結果に見られた差が親としての経験の違いである可能性のほかに、子どもの反抗の質の違いを反映する可能性もある。本論では反抗の内容や母親の対応を取りあげておらず、これらは今後の検討課題である。

最後に、2歳児では反抗期・扱いにくい群と非反抗期・扱いにくい群の得点の分散が大きかった。3歳児では反抗期・扱いにくい群の分散が大きかった。いずれの群にも子どもが扱いにくいと認識する母親が関与しているが、母親の感じ方の個人差が大きそうだ。

子どもが扱いにくいという認識が母親の主観であるとしても、それが母親にとっての現実なのである。そのような母親への介入や援助を考える場合、個別具体的に、つまりその親子の関係や親の知覚に焦点を当てる必要があるだろう。

引用文献

- Bates, J. E., Pettit, G. S., Dodge, K. A., & Ridge, B. (1998). Interaction of temperamental resistance to control and restrictive parenting in the development of externalizing behavior. *Developmental Psychology*, **34**, pp. 982–995.
- Cutrona, C. E. (1984). Social support and stress in the transition to parenthood. *Journal of Abnormal Psychology*, **93**, pp. 378–390.
- Edwards, C. P., & Liu, Wen-Li. (2002). Parenting toddlers. In Marc H. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting Vol. 1* (pp. 45–71). Second Edition. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fleming, A. S., Ruble, D. N., Flett, G. L., & Van Wagner, V. (1990). Adjustment in first-time mothers: Changes in mood and mood content during the early postpartum mothers. *Developmental Psychology*, **26**, pp. 137–143.
- 福田一彦・小林重雄 (1973). 「自己評価式抑うつ尺度の研究」. 『精神神経雑誌』, **75**, pp. 673–679.
- Gross, D., Conrad, B., Fogg, L., & Wothke, W. (1994). A longitudinal model of maternal self-efficacy, depression, and difficult temperament during toddlerhood. *Research in Nursing and Health*, **17**, pp. 207–215.
- 児童虐待防止協会 (1997). 電話相談における子どもの虐待防止アセスメント基礎調査：母と子のサポートに向けて. 電話相談における母親のストレス研究会・児童虐待防止協会.
- Kagan, J. (1978). *The growth of the child: Reflections on human development*. New York: Norton.
- 柏木恵子・若松素子 (1994). 「『親となる』ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み」. 『発達心理学研究』, **5**, pp. 72–83.
- 水野里恵 (2002). 『母子相互作用・子どもの社会化過程における乳幼児の気質』. 東京：風間書房.
- 野澤みつえ (1989). 「親業ストレスに関する基礎的研究」. 『関西学院大学文学部教育学科研究年報』, **15**, pp. 35–56.
- 大日向雅美 (1988). 『母性の研究』. 東京：川島書店.
- Putnam, S. P., Sanson, A. V., & Rothbart, M. K. (2002). Child temperament and parenting. In Marc H. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting Vol. 1* (pp. 255–277). Second Edition. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 坂上裕子 (2003). 「歩行開始期における母子の共発達：子どもの反抗・自己主張への母親の適応過程の検討」. 『発達心理学研究』, **14**, pp. 257–271.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則 (1994). 「育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連」. 『心理学研究』, **64**, pp. 409–416.
- Stevenson-Hinde, J., & Simpson, A. E. (1982). Temperament and relationships. In R. Porter, & G. M. Collins (Eds.), *Temperamental differences in infants and young children* (pp. 51–65). London: Pitman.
- 高濱裕子 (2000). 「子どもをめぐる大人の役割と関係の認識：幼稚園教諭と母親の比較から」. 『保育学研究』, **38**, pp. 28–35.
- 氏家達夫 (1996). 『親になるプロセス』. 東京：金子書房.
- Ujiie, T. (1997). How do Japanese mothers treat children's negativism? *Journal of Applied Developmental Psychology*, **18**, pp. 467–483.
- 氏家達夫・高濱裕子 (1994). 「3人の母親：その適応過程についての追跡的研究」. 『発達心理学研究』, **5**, pp. 123–136.
- Wenar, C. (1982). On negativism. *Human Development*, **25**, 1, 23.
- Zung, W. W. K. (1965). A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, pp. 63–70.

付記 本研究にご協力くださった保護者のみなさまに心より感謝申し上げます。調査の実施にあたり、尾張旭市、日進市、西東京市の母子保健担当各位より多大なご協力をいただきました。また、草稿段階で氏家達夫先生（名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター教授）から貴重なコメントをいただきました。記して感謝申し上げます。本研究は、平成14年度および平成15年度の椙山女学園大学学園研究費(B)の助成を受けました。